

動物の「痛み」に気付いてあげられるのは「あなた」です！

動物にも、人と同じように「痛み」があります。この「痛み」は、身体のどこかに病気があることを自分に知らせるための大切な信号でもあります。しかし、動物は言葉で「痛み」を伝えることができません。飼い主様が愛犬の「痛み」に気付いてあげないと、知らず知らずのうちに病気が悪化してしまう場合があります。

たとえば、ペットとして飼われていても、ワンちゃん達は本能的に自分の痛みを隠そうとします。これは、かつて野生だった頃、敵に自分の弱点を知られないための防御本能の名残なのです。特に、整形外科疾患(骨関節炎など)などが原因で起こる**「慢性的な痛み」**の場合は、発見が難しい事があります。

ただし、例外があります。ワンちゃん達は、自分が最も信頼する飼い主様だけには「痛み」を隠すことはありません。

「動物のいたみ研究会」では、慢性痛に苦しむワンちゃん達の「痛み」を飼い主様が簡単に発見できるよう、評価基準を作成しました。**裏面にある慢性痛判定シート**は、実際に慢性痛を持つワンちゃん達の行動や飼い主様へのアンケートを基にした調査研究によって完成したものです。

お家にいるときのワンちゃん達の様子を思い出しながらチェックしてみてください。

ひとつでも当てはまる項目があれば、かかりつけの動物病院に相談しましょう。

動物のいたみ研究会は、動物の「いたみ」からの解放こそ獣医療の重大な使命であるとの理念のもとに、学術研究と「いたみ」治療の普及・啓発を図ることを目的に活動しています。



動物のいたみ研究会
〔(公財)動物臨床医学研究所〕





犬の痛みに気づいてあげよう!

動物のいたみ研究会
〔公財〕動物臨床医学研究所

運動器疾患による

慢性痛を見抜くポイント

以前と比較して…



散歩に行きたがらなくなった。
散歩に行っても走らなくなり、
ゆっくりと歩くようになった。

1



階段や段差の上り下りを
嫌がるようになったり、その際の
動作がゆっくりになった。

2



家の中や外で
あまり動かなくなった。

3



ソファ、イス、ベッドなどの
高いところへの上り下りを
しなくなった。

4



立ち上がるのが
つらそうに見える。

5



元気がなくなったように
見える。

6



飼い主や他の犬と、
またはおもちゃなどで
遊びたがらなくなった。

7



尾を下れていることが
多くなった。

8



はこ
跛行[※]がある。

※足を引きずったり、ケンケンしながら歩くこと。
または、足を全く地面に着かずに挙げながら歩くこと。

9



寝ている時間が長くなった、
もしくは短くなった。

10

これらの変化が
動物に認められた場合には、
慢性の痛みで苦しんでいる
可能性があります。

かかりつけの動物病院に
相談しましょう!



あなたの犬は痛みに苦しんでいませんか？

下記の項目に当てはまるものがあれば、 チェックをして下さい。

- [1] 散歩に行きたがらなくなった。
散歩に行っても走らなくなり、
ゆっくりと
歩くようになった。



- [6] 元気がなくなったように
見える。



- [2] 階段や段差の上り下りを
嫌がるようになったり、
その際の動作が
ゆっくりになった。



- [7] 飼い主や他の犬と、
またはオモチャなどで
遊びたがらなくなった。



- [3] 家の中や
外であまり
動かなくなった。



- [8] 尾を下げていることが
多くなった。



- [4] ソファ、イス、
ベッドなどの
高いところへの
上り下りを
しなくなった。



- [9] はこう
跛行^{*}がある。

^{*}足を引きずったり、
ケンケンしながら歩くこと。
または、足を全く地面に着かずに
挙げながら歩くこと。



- [5] 立ち上がるのが
つらそうに見える。



- [10] 寝ている時間が
長くなった、
もしくは
短くなった。

